

家事をする女性たちの教養と価値観

—江戸期女子用往来物の分析から—

遠藤 佳奈子*

The Cultural and Value-based Norms of Women Engaged in Household Chores :

An Analysis of “Ouraimono for women”,
Elementary School Textbooks Used by Women during the Edo Period

ENDOOU Kanako

Abstract

The objective of this paper is to elucidate the cultural and value-based norms pertaining to domestic responsibilities and daily life that were expected of women who were in charge of household chores during the early modern period. One of the principal factors that shaped the culture of women's lives was the “Ouraimono for Women” series of elementary school textbooks designed for women's education. From the available corpus, three texts were selected for closer analysis: *Onna Daigaku Takarabako*, *Jyoyou Chie-Kagami Takaraori*, and *Onnayou Bunsyō Itoguruma*. The selected texts were classified into six categories. The categories included articles on culture, practical knowledge, and fortune-telling, which were deemed to be particularly relevant to the context of daily life. The results indicated that women in the early modern period were expected to demonstrate a cultivated understanding of waka poetry, an awareness of seasonal expression, specific skills related to clothing and daily life, and a sense of appearance and practical ability. Due to their superior sense of time and physical sensibility, such women's cultivation facilitated the efficient completion of daily household tasks and the maintenance of harmonious interpersonal relationships.

Keywords : Household chores, A sense of appearance, Value-based norms,

An awareness of seasonal expression, “Ouraimono for women” : Elementary School Textbooks

1. はじめに

家事は人間の営みであり、ある種の文化、価値観を内包している。現代の我々であれば「時短」「効率化」「丁寧さ」などがあるろう。日本の家事労働の内容について、小泉和子「家事の近世」は、家政学文献の検討を通じ、江戸時代の家事の内容はすでに、衣食住、家計管理や交際、育児、看護といった、現在の家事とほとんど変わらないものであったことを述べた¹。ただし、近世では家政書の多くが家長である男性に向けられており、女性向けの書物である女訓書には、衣分野と妊娠出産育児、看護に関する事項以外は、もっぱら教養書としての色合いが濃かったと指摘している²。また、中流武家や商家女性の日記の分析から、実際の家事として、交際やもてなし、日常の衣・食関係の多くが女性により行われていたことを示した。

キーワード：家事、たたずまい、価値観、季節感、女子用往来物

*令和3年度生 比較社会文化学専攻

一方、こうした近世の女性たちが持っていたであろう、家事に対する「価値観」、つまり、家事労働に求められた文化や教養がどのようなものであったかは、必ずしも明らかになっていない。江戸時代の女性の職分としてはいわゆる「女訓」があり、儉約や婦徳などの儒教道徳を内面化することを期待されていた³。近代家族の成立以前、武家を含むほとんどの家庭において、家業と家事は不可分なものであり、女性たちは今日という家事労働と家業の労働双方を担うことや、奉公人として他家で働くことがあった。これまでの女性史研究では、衣生活と日々の食に関する家事、交際など日々忙しく立ち働く様々な層の女性労働の姿が描き出されている⁴。一方で、彼女たちの内面にあったであろう、婦徳の範疇に収まらない、生活にまつわる価値観や教養についてはいまだ十分に検討されていない。

本研究は、近世に家事の担い手であった女性たちに期待された、家事や生活にまつわる教養や身体感覚、価値観のあり方を探るものである。明文化されていない家事の価値観を抽出するにあたり、本稿では、江戸時代の寺子屋や家庭内での教科書「女子用往来物」を検討の対象とする。女子用往来物は江戸時代を通じ1,000種以上発行され、手習いを通じて様々な知識や教養を得るための書物であった。大部になる豪華な挿絵付きのものもあれば、小冊子のような形態もあり、往来物研究を体系化した石川松太郎は、本文の内容から大別して、儒教道徳を説く教訓型、手紙文例を扱う消息型、社会の事物を紹介する社会型、総合的な内容を扱う知育型の4類型に分類している⁵。石川以降、女子用往来物の研究はこの4類型に依拠しているため、本稿でも同じ分類を採用する。

2. 先行研究

女子用往来物は従来、女子教育史の資料として、「女大学」に代表されるような女訓的・儒教道徳的な教科書として研究されてきた。ただし1990年代以降、女性史研究において、より多様で現実的な近世女性の姿が明らかになっていくにつれ、総合的で生活に密着した様々な記事が入った「読み物」としての側面が注目されるようになった。女子用の消息型往来物を包括的に研究した天野晴子は、女子消息型往来を、「生活に直結した知識・道徳・技術を盛り込んだ『生活総合型教科書』」⁶と評し、教訓型往来に見られる儒教的な女性像と匹敵するような、自らの才覚でたくましく一家の交際を切り盛りする女性像の存在を示している。こうした、女訓以外の多様な価値観や生活に密着した知識を含む内容は、消息型・知育型・社会型などの各種往来や、教訓型往来物であれば口絵や附載記事に多く含まれていた。

このうち、『女大学宝箱』については、横田冬彦が「『女大学再考』—日本近世における女性労働—」において、附載記事の内容を分類・計算していた⁷。横田を引き継ぐ形で、中村一代「女訓書付載記事の研究—『女大学宝箱』とその類書を中心に—」でも、関連する5種の教訓型往来物（女訓書）とあわせて、挿絵や付載記事について比較・検討されている⁸。横田・中村は共に、従来、封建的な女訓を説く書物とされてきた女訓書の全体の文字量の半分程度を付載記事が占めていたこと、またその付載記事の内容が多様多様であり、「女訓書」としてだけではない、教養書・実用書としての役割があったことを指摘した。

ただし、こうした女子用往来物を読んだ女性たちの教養や知識の体系を検討するにあたっては、より多くの女性向けの読み物、少なくとも、教訓型以外の女子用往来物にも幅を広げる必要がある。

そこで本稿では、中村も扱った『女大学宝箱』に加え、知育型往来から『女用智恵鑑宝織』、消息型往来から『女用文章糸車』という、いずれも比較的普及をみた女子用往来物3点を対象に、女子の生活にまつわる教養・価値観にはどんなものがあったかを検討する。

『女大学宝箱』（以後、『宝箱』とする）は、江戸期の女子用往来物のなかでも広く普及し、初版の享保期より幕末に至るまで多数版を重ねた記録が残っている。また、本文記事の「女大学」の人気・流行ぶりにあやかり、「女大学」と冠した往来物や書籍は明治以降も多数刊行された。今回は中村と同じ、享保元（1716）年8月刊行板を使用する⁹。『女用智恵鑑宝織』（以下、『宝織』とする）は、明和6（1769）年、浪華書林・柏原屋清右衛門により発行された、知育型の女子用往来物である。本書の選択理由は、分析に使用した燦の会版の序文で石川松太郎が、江戸中期の中でも代表的な手本の一つとして位置付け、「女性の生涯学習に相応しい教科書」と評しているためである¹⁰。一方、『女用文章糸車』（以後、『糸車』とする）は、明和9（1772）年9月刊行、北尾辰宣画、大坂・渋川清右衛門版の消息型往来物である。消息型の女子往来では比較的普及をみたこと、附載記事が豊富な

ことから選定した¹¹。

女子用往来物の4類型のうち、社会型は刊行された種類が他の類型に比べて少ないこと、趣味的・専門的な内容が多く、生活にまつわる教養を扱うという本稿の趣旨を鑑みて、検討を割愛した。本来であればより多くの往来物を比較参照することが望ましいが、往来物には類似した内容が掲載されることも多く、全面的な検討は本稿の検討の範疇を超える。そのため、教訓型・消息型・知育型の3類型より代表的な文献1点ずつに絞って分析、検討することとした。

今回扱う女子用往来物はいずれも、挿画をふんだんにあしらった分厚いものであり、参照・入手できるのは、武家・商家の上中流家庭、もしくは相応の生活水準をもつ庄屋などの社会的・経済的地位の上位層と考えられる。『宝織』巻末には、広告「女中の見玉ひ益有本目録」に『宝箱』『糸車』の書名が記載されており、3冊の読者層はほぼ共通していたとみてよい。こうした女子用往来物は、比較的豊かな階層の女性たちが代々家内で読み継いだほか、周辺地域の家庭への貸し借りが行われたこと、また、読者である女性が教師となって寺子屋教育の教科書として使っていた可能性も指摘されている¹²。

当時の社会では、女性の家事労働の内容も社会階層や経済状況により大きく異なっていた。武家の女性は、主人不在時には連携を取りつつ家の切り盛りをすることもあったし¹³、商家では一部家業を補佐するほか、奉公人を束ね、衣生活を取り仕切るほか、催事やもてなしの際には自ら馳走を作ることもあった¹⁴。階層が高い層であっても、特に衣生活については女主人が縫製まで担当する例も多く、武家でも俸給が少なければ、使用人を使わず全てを主婦が担当することもあった。こうした武家・商家の日常家事で記録が多く残っているのは、来客の接待と贈答である。来客の接待と贈答は、家の内外をつなぐ家事であり、今回検討する女子用往来物に記載された社会知識や教養が直接的に生きる場といえる。

農民・職人・漁労民などのより身分が低い層の場合、生業の他、日常生活を支える細々とした家事の一切に女性は寸暇を惜しんで立ち働いた。こうした民衆の女性から女性へ、いわば非言語的に学習・伝達される知識・教養について、深谷昌志は「家事に関する知識・技能と農業労働に従事しうる体力・技能から構成され、生活の必要から生みだされた実学の体系」と表現している¹⁵。また、地域や季節労働、教育の一環として、奉公や賃労働に従事するものもあった¹⁶。

以上のように、身分社会であった近世、こうした家事労働の内容は階層により大きく差異があった。加えて、女子用往来物の読者に関する研究は管見の限り見つけることができなかった。そのため、本稿で扱う女子用往来物に描き出された「女子の生活教養」が、どのような層の女性たちにどう体现されたか、読者層として想定される武家・商家・豪農などの比較的高い社会階層の女性たち以外にも影響を与えたかどうかについては、検討することができない。ただし、寺子屋での女子教育や、奉公といった経験を通し、女子用往来物の読者層でない女性たちも、読者層の持っていた家事に関する価値観や教養に間接的に触れ、ときに周囲に波及させていったことが推測できる¹⁷。加えて、女子用往来物の記事は、明治以降も女性雑誌や家事教科書に引き継がれた内容も多く、ここで重視されていた教養や文化はのちの時代に継承される可能性が高いと考えられる。そのため、女子用往来物を検討の対象とすることとした。

江戸時代の読み物はジェンダー化されており、男女で知識・教養の領分が異なっていた。往来物も男子用は「往来物」、女子用は「女子用往来物」と区別され、内容も大きく異なっていた。元禄期に出版技術・文化が発展して以降、明治に至るまで数多く発行された女子用往来物であるが、総体としては「一定の知識・教養の守備範囲」を逸脱しない内容が繰り返し用いられ、女性の知のあり方を規定する役割も果たしていた。一部、儒教の女性観を批判した只野真葛¹⁸や、男性の領域であった漢詩文に才を発揮した女性たちも存在した¹⁹が、彼女たちはあくまで例外的な存在であり、読者層である女性の大多数は、この「女性特有の知の体系＝女性の生活教養」の中で考え、暮らしたことが推察される。本稿は、読み手である女性たちの視点に立ち、「女性の生活教養」を明らかにするものである。

3. 本稿の目的・研究方法

『女大学宝箱』『女用智恵鑑宝織』『女用文章糸車』を読み解き、そこに描かれた生活にまつわる女性の教養の

あり方について論じる。生活にまつわる女性の教養を扱う上では、本文と同様に各書物を特徴づけ紙幅を占めた、口絵や附載記事の分析が不可欠である。そのため、本稿では、口絵・付載記事に着目した先行研究である中村²⁰の分類を元に、表紙・裏表紙・目次・広告欄と奥付を除くすべての記事を以下のように分類する。

- 1 (教訓) —A 烈女伝 B 和歌 C 心得・教訓・その他
- 2 (教養) —D 和歌 E 事物の起源・由来 F 香道・琴の譜面・双六・他娯楽
- 3 (実用的知識) —G 語彙・手紙文例など H 裁縫など I 婚礼・儀礼・作法・折形
J 身だしなみ
- 4 (医学的知識) —K 懐妊・出産・子育て L 病薬
- 5 (女性の姿) —M 労働・職業 N 風俗
- 6 (相性・吉凶) —O 相性・吉凶など

中村が分析したのはすべて女訓書であるため、本文を0 (本文)、附載記事を1～6としたが、『糸車』は消息型、『宝織』は知育型のため、本文0に教訓・教養・実用的知識などが混在する。そのため、本稿では本文と附載記事とを区別せず1～6で分類、女訓部分は1-Cとする。また、今回、琴の譜面や双六などの記事があるため、中村が2-F香道とした分類を、2-F香道・琴の譜面・双六・他娯楽とする。記事のうち、1頁を上下二段組、上中下の三段組になっている場合、下段が本文、上・中段が附載記事に該当し、下段に比して文字が小さいため、実際の情報量は附載記事の方が多い。ただし、本稿では中村の分析と同様に、紙面内に割かれた割合で比較し、文字数の計算は行わない。三文献はそれぞれ元文献の大きさが異なるが、文献同士の大きさは比較考慮しない。表内では、本文・口絵等が段組で分かれている場合、1頁の1/2を■、1/4を□とし、三段組の場合は1/3を△、2/3を▲とした。これも同じく、文献同士での1/2、1/3の大きさの比較は行わない。以下、資料にあった旧仮名遣いは、利便性の観点から可能な限り現代仮名遣いに直して表記する。

4. 分析結果

『宝箱』『宝織』『糸車』について、それぞれの記事内容を表にまとめた。

(1) 『女大学宝箱』について

『宝箱』は冒頭の口絵が一段組、本文が二段組である。巻末の附載記事は三段組だが、下段が紙面の1/2を占めているため、上段・中段はそれぞれ1/4とした。分析結果は表1の通りである。

(2) 『女用智恵鑑宝織』について

『宝織』は大別して口絵・本文部分・広告及び奥付の三部に分かれる。本文は三段組で、紙幅の下半分を中核部分となる本文が占める。本文部分の後には、同時期に発行・流通していた女性用読み物の広告・目録、奥付がある。分類結果は表2の通りである。

(3) 『女用文章糸車』について

『糸車』は一段組・二段組の口絵の後、全体の80%以上を二段組の本文が続き、附載記事と奥付で構成される。分析結果は表3の通りである。

表1 『女大学宝箱』記事内容一覧

NO.	分類	表題	頁数	分類	内容
1	-	表題	1	-	
2	口絵	仁義礼智信の図	1	1-C	
3		女農業之図	4	5-M	
4		南京八景	2	2-D	
5		十二月色紙和歌	3	2-D	
6		源氏物語	14	2-D	
7		※読書・手習い・琴を吟じる図	4△	2-E	
8	本文 上段	※書物の起源	1△	2-E	
9		※文字の起源	1△	2-E	
10		※裁縫は女子第一の技	1△	3-H	
11		※衣生活関係の家事の図	12△	3-H	布を広げる図、反物を広げる図、綿帽子づくり、裁縫、火熨斗かけ、糸紡ぎ、機織り
12		衣裳をたつときの歌	1△	3-H	
13		縫針のはじめ	1△	2-E	
14		火熨斗という言葉の起こり	1△	2-E	
15		苧績みのすすめ	1△	3-H	
16		※布について	1△	3-H	
17		衣裳の正字尽し	3△	3-H	
18		※木綿のこと	1△	3-H	
19		※絹糸のこと	1△	3-H	
20		※洗濯・染め物・しみ落としは女子の技	2△	3-H	
21		※衣生活関係の家事の図②	2△	3-H	洗濯、洗ひ張り
22		※綿帽子づくり	2△	3-H	
23		※機織りのはじめ	2△	2-E	
24		※女職人・商人の図と解説	36△	5-M	念珠屋、組物屋、括し屋、水引屋、紙漉き屋、索麵屋、扇屋、縫い針屋、賤の女とは、黒木、茶摘み、養蚕、海女、蟹戸、遊女、商い女
25		※身だしなみに関する謂れ	8△	2-E	髪を結うこと、白粉、燕脂、鏡
26		※女性にゆかりの深い行事の謂れ	4△	2-E	七夕祭り、庚申待
27		※教訓	1△	1-C	教訓
28	本文 下段	本文（女大学）	86×2△	1-C	
29	附載 記事 上段	百人一首	25△	2-D	
30	附載 記事 中段	本朝二十四孝	24△	1-A	※烈女伝の類とする
31	附載 記事 下段	世継草	10△	4-K	
32		小児養育草	13△	4-K	
33		小児急用薬草	1△	4-K	
34	奥付	作者について・奥付	2△	-	

注1：順番は登場順、同じ内容の項目は最初に登場した箇所に集約した。

注2：※の表記は実際の表題名ではなく、筆者が整理のためまとめた表題である。

注3：1頁の1/3を△とする。

『女大学宝箱』小川彦九郎・柏原屋清右衛門板、享保元（1716）年 石川松太郎監修『往来物大系 第87巻』大空社、1994年所収より、筆者作成。

表2 『女用智恵鑑宝織』記事内容一覧

NO.		内容	頁数	分類	内容
1		表題	1	-	
2		赤染右衛門の事	1	1-A	
3	口絵	住吉社名所	2	2-D	
4		木綿の図 種蒔より織まで	4	5-M	
5		五常和歌団式	4■	1-C	
6	口絵	十界和歌絵抄	5■	1-B	
7	上段	和歌威徳傳略	3■	1-A	
8		七夕歌づくし	8■	2-D	
9	口絵	目次・序絵（くちえ）目録	20■	-	
10	口絵	鄭氏女孝経を作る図	1	1-A	
11	本文	女一代八卦	142□	6-0	※生れ年・日・月の善悪、各種の吉日、夢はんじなど
12		大和詞大成	70□	3-G	
13		小笠原包物折形	5□	3-I	
14	本文	女諸礼集	53□	3-I	※食事作法、膳の据えよう、普段の行儀などの振る舞い方
15		万積物の図	7□	3-I	
16		目録書やうの事	4□	3-I	
17		当流裁物ひでん	10□	3-H	
18		にほひ袋の方	4□	2-F	
19		女中諸病妙薬	12□	4-L	
20		穢物おとし秘伝	8□	3-H	
21		絹練りやうの事	2□	3-H	
22		染ものひでん	6□	3-H	
23		双六の手引	14□	2-F	
24		女中文章書替字	65□	3-G	
25		※産育系知識	30□	4-K	懐妊の事、女子を転じて男子となす事、懐妊をこころ見る法同法養の事、ほか産後・小児の産育儀礼など
26		本文	女用智恵鑑(本文 ※女訓部分)	37■	1-C
27	女常に心得べき故事		5■	2-E	庚申待、辻占、織ぬいの始まり
28	女常に心得べき故事		33■	1-A	※嵯峨天皇の御後の事ほか故事
29	女常に心得べき故事		3■	6-0	三十二相
30	女中言葉づかいの事		13■	3-G	
31	女中ならふべき条々の事		2■	1-C	
32	婚礼心得べき条々		13■	3-I.1-C	
33	女中文書よう 九ヶ条		5■	3-G	
34	短冊歌書よう 並寸法の事・扇子にものかく事・国字(かな)づかいの事		5■	3-G	
35	女用文章		72■	3-G	
36	琴の組十五曲		25■	2-F	
37	附載記事	女中の見玉ひ益有本目録	2	-	
38	奥付	奥付	1	-	

注1・2 は表1に同じ。

注3：1頁の1/4を□、1/2を■とする。

伊藤敏子、小泉淑江、柳秀子『翻刻・影印 女用智恵鑑宝織』燦の会、2020年 より筆者作成。

表3 『女用文章糸車』記事内容一覧

NO.	位置	表題	頁数	分類	内容
1		表題	1	-	
2	口絵	烈女伝	5	1-A	
3		女中風俗品定	9	3-J	身だしなみや化粧、姿勢のポイント、女訓的な内容
4		女いとなみ草	4△	5-M	士農工商とは
5		士農工商の字尽し	4△	3-G	士農工商に関する字尽し
6		女の手わざ草	6▲	3-H	
7		女中大和詞	6△	3-G	
8		色紙短冊の本説	■	2-E	短冊、色紙のいわれ
9		色紙短冊の本説	2+■	3-G	短冊、色紙の書き方
10		文の道しるべ	5	3-G	うち1頁は折形
11		染物の法	2△	3-H	
12		洗濯・染物の図	2△	3-H	
13		志み物落し様	2△	3-H	
14		七夕歌尽	2	2-D	
15		薫物の方	2△	2-F	
16		薫物の図	2△	2-F	
17		匂袋の方	2△	2-F	
18		婚礼略式	4	3-I	
19		御厨子の図説	1	3-I	
20		黒棚の図説	1	3-I	
21		化粧の間の図説	1	3-I	
22		貝桶の図説	1	3-I	
23		四季衣裳の図説	4	3-H	四季折々の柄
24		女中名尽くし・魂の相性を知る 図・有卦無卦・守本尊を知る歌など・ 男女相性の事・不成就日・願成就日	2	6-0	
25		教訓かさね草	8	1-C	
26	口絵	女中文の志様	5△	3-G	
27	上段	小笠原流折形	2△	3-I	
28	口絵 下段	目録	1+7▲	-	
29	本文 上段	※毎月・季節の行事ごと・語彙	104△	3-G	
30		※女訓的な内容	8△	1-C	物の貸し借り心得、男女の職分
31		※生育儀礼	6△	3-I	懐胎・食い初め・髪置など
32	本文 下段	本文（女用文章糸車）	118▲	3-G	
33	附載 記事	即座之占	4	6-0	
34	奥付	書籍目録	4	-	

注1・2 は表1に同じ。

注3：1頁の1/3を△、2/3を▲、1/2を■とする。

『女用文章糸車』北尾辰宣画、渋川清右衛門板、明和9（1772）年 石川松太郎監修『往来物大系 第93巻』大空社、1994年所収 より筆者作成。

以上3文献を分類別に整理すると、表4のようにまとめられる。

表4 各文献・内容別分類表

	教訓型『女大学宝箱』	知育型『女用智恵鑑宝織』	消息型『女用文章糸車』
1 (教訓)	51%	22%	9%
2 (教養)	27%	11%	2%
3 (実用的知識)	7%	47%	84%
4 (医学的知識)	2%	4%	0%
5 (女性の姿)	12%	2%	1%
6 (相性・吉凶など)	0%	16%	2%

表1-3記載の文献より筆者作成。端数が発生するため『宝箱』は合計99%、『糸車』は98%、重複して分類した頁があるため、『宝織』は合計102%。

教訓型『宝箱』は、1(教訓)が半分、その他記事で半分、という構成である。中村も指摘しているように、他の往来物に比べて、5-M(女性の姿・風俗図)の紙面割合が高く、社会型との共通点が多いのも特徴である。知育型である『宝織』は、3(実用的知識)が半分程度を占めるほか1、2、6にその他の記事が分散しており、4、5は少ない。消息型『糸車』は、8割以上が3(実用的知識)であるが、その大半が消息文例で構成されている。

5. 考察

記事分類1~6のうち、家事や生活に関する教養や価値観に影響を与えたと考えられるのは、2(教養)3(実用的知識)である。また、女性たちの生活に密着した人間関係や家族関係を考える上では、6(相性・吉凶)からも示唆を得ることができる。そこで本稿では、特に2(教養)3(実用的知識)6(相性・吉凶)について考察していきたい。

(1) 2(教養)一和歌という教養

2(教養)項目は、『宝箱』では27%と全体の3割弱、『宝織』では11%、『糸車』では2%であった。その中心を占めたのが2-D(教養-和歌)に関する項目である。

和歌の項目が比較的多いのが『宝箱』であり、南京八景・十二月色紙和歌・源氏物語・百人一首が掲載されている。この時代、百人一首も女子用往来物の一部として刊行されており、女性の学ぶべき文学的な教養といえは和歌であった。『宝織』では「住吉社名所」と「七夕歌づくし」の口絵がある。往来物を研究した江森一郎・小泉吉永によれば、七夕は、「手習いや裁ち縫い等男女ともに自ら習得に励んでいる技芸の上達を願う日であり、時には寺子屋を挙げて行う行事であった」²¹ため、七夕に関する記事や歌は他の往来物にも頻出した。『宝織』では、七夕の由来が1/2頁、七夕飾りをあしらった室内で音楽にあわせて踊る少女たちを描いた口絵が1/2頁、他は七夕にまつわる和歌を色紙にあしらったものが6頁にわたり描かれている。『糸車』でも七夕の和歌が口絵で描かれているため、2-D(教養-和歌)とした。

2-D(教養-和歌)に次いで多い項目が、2-E(教養-事物の起源・由来など)項目である。『宝箱』では、先述した七夕の由来のほか、読書や手習い・文字の由来が本文の前に置かれており、これから読む女訓や往来物そのものの意義を強調している。女性の担った衣生活に関する家事「縫針」「火熨斗」「機織り」や、女性の身だしなみである結髪や化粧などについても、単純に技術を伝えるにとどまらず、由来や烈女伝と関連させながら解説している。こうした、物の由来から説き起こす姿勢には、『宝箱』の書き手が、読み手である女性たちに教養的な物の見方を期待し、物事の道理や歴史を知ったうえで行動をしてほしい、という願いが見て取れる。『糸車』では、短冊や色紙の具体的な書きぶりを示す項目の前に、その意義を示す2-E(教養-事物の起源・由来など)がある。

このほか、より趣味的・娯楽的な要素の強い項目として、2-F(教養-娯楽)項目がある。『宝箱』では該当なし、

『宝織』では香道・双六・琴、『糸車』では香道があった。

(2) 3 (実用的知識)

3 (実用的知識) は、『宝箱』の7%、『宝織』の47%、『糸車』は84%を占める。このうち『糸車』は本文を含むほとんどが3-G (実用的知識-語彙・手紙文例など) であり、『宝織』『宝箱』と共通する内容が多く含まれる。

① 3-G (実用的知識-語彙・手紙文例など) — 「季節感」という教養

3-G (実用的知識-語彙・手紙文例など) には、日常生活での言葉づかいに関する項目と、文章の書き方や表現、手紙文例に関するものがある。前者はいわゆる女房ことばを示したもので、『宝織』上段の「大和詞大成」下段「女中言葉づかいの事」、『糸車』口絵「女中大和詞」がある。女房詞は、室町初期から宮中に仕える女房の使用した独特な言葉づかいだが、このような往来物によって、裕福な町人の子女にまで広まっていった。物の名前などを言い換えた隠語のような機能があり、女房詞を知っていること、使えることが、ある種の上品さ、教養を示す効果があったものと考えられる。

『宝織』本文下段の約半分、また『糸車』本文全文が、文章の書き方、表現、消息文例に関する記事である。同じく『宝織』でも、文字の書き方や文章についての作法と心構え、消息文例が掲載されている。『糸車』の本文「女用文章糸車」では、38種類の消息文例と25の返事の文例があり、他の消息型往来物と共通した構成である。冒頭「正月」にはじまり、四季折々の行事ごとや生育儀礼、家移りや嫁入りなどの重要な行事ごとへの招待、物の貸し借り文例などの通年使用できる文例を挟みながら、12月まで一年分の交際文例を掲載している。こうした文例は、基本的にそのまま書き写して使えるものであり、当時の交際の場では、まずは手紙文面を型通りに書ける知識水準が求められた。また、消息文例には、文面・文字の手習い見本としての側面のほかに、行事にまつわる定番の言い回しや季節感表現を習得させる機能があった。

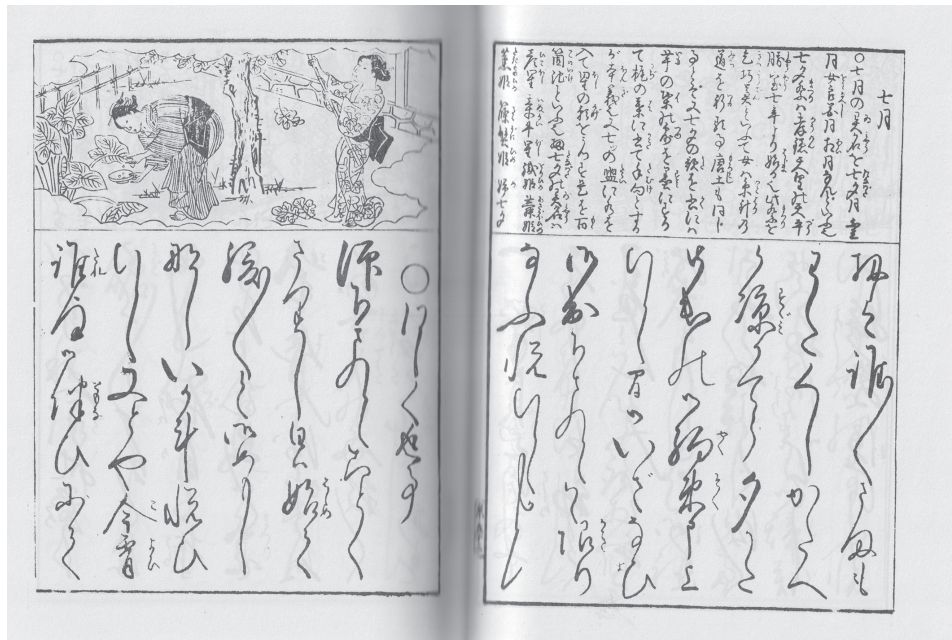


図1 『女用文章糸車』糸52 石川松太郎監修『往来物大系 第93巻』大空社、1994年

『糸車』版面上段には図1のように、本文に関連する知識や語彙がまとめられている。特筆すべきは、月・時期・行事ごとに、季節感を示す風物が細分化されて示されていることである。月の異名をはじめ、その月や行事の由来、代表的な祭り、自然、動植物や食材、献立などが掲載されている。同じく上段には手紙の書き方について「同じ言葉の重複を避けること」という指南もあり、季節に関する語彙を多く知ること、自然や動植物についての知

識をもつことが、消息を作る際に類語辞典を参照するような機能をもたらしたことが想像される。こうした季節の風物は、春夏秋冬の四季の括りではなく、十二月や行事といった、より細かい単位の時期と結びつけられていたのも特徴的である。読者である女性たちは、3-G（実用的知識-語彙・手紙文例など）で身の回りの自然、動植物、食材や献立などの微妙な移り変わりを感じ、観察する感性を育てていった。

ところで、こうした季節の風物の列挙は、俳諧における歳時記を連想させる。俳諧歳時記の本格的な成立は嘉永4（1851）年『増補俳諧歳時記栞草』とされるが、それ以前であっても、すでに正徳3（1713）年『滑稽雑談』の頃には、年中行事や本草学の事項などを含んだ歳時記が成立しており、細々とした事象を季ごとに分類する、という歳時記的な感性が共有されている時期でもあった。2（教養）について見た通り、女性にも和歌の教養が求められていたこと、社会型往来物のうち、年中行事を扱ったものとして、元禄6（1693）年には『女筆四季往来』なども存在しており、今回分析した女子用往来物もこうした「季節を捉える感性」をよきもの、望ましいものとして位置づけていたことがわかる。

② 3-H（実用的知識-裁縫など）一衣生活における具体的な家事技術

『宝箱』では、衣生活の具体的な家事技術について、挿絵とともに多くの紙幅を割いている。「裁縫は女子第一の技」という教訓的な記事以降、本文上段の31頁分、内容も絹や綿を育てるところから糸紡ぎ、裁縫、洗濯まで網羅的に掲載されている。これらは家事技術の解説に加えて、衣生活のいわれや歴史的背景の解説という側面が強く、女性労働全般を広く解説する、という『宝箱』全体の趣旨に沿った内容となっている。『宝織』中段3-H（実用的知識-裁縫など）には、日常の家事に関する具体的な項目として、図解による反物の裁ち方、各種染みの落とし方、生糸を精練漂白する方法、各種染物の方法といった、衣生活の家事技術の具体的な解説がある。『糸車』では、定番である染め物・洗濯・しみ落しの記事に加え、「四季衣裳の図説」として、春夏秋冬に勧める着物の柄行きが解説されているが、他の婚礼にまつわる項目に連続していることから、嫁入り衣裳づくりの一環として参考にされたであろうことがわかる。

「はじめに」でも述べたように、女性の家事役割のなかで最も重要視されたのが、衣類関係の事柄であった。しみ落としについては貝原益軒『万宝鄙事記』にも掲載があり、洗濯を下女に任せる層の女性であっても、技術の理解が求められた²²。今回分析した往来物3点中、具体的な家事技術に関する項目は、この3-Hにある衣生活に関する事項に限られた。

③ 3-I（実用的知識-婚礼・儀礼・作法・折形）一「たたずまい」の教養

『宝織』中段の巻頭記事「女諸礼集」は全編が3-I（実用的知識-婚礼・儀礼・作法・折形）の「儀礼・作法」にあたる。といっても、婚礼のような晴れの場に限りならず、日常、普段の生活に密着した身体動作が具体的に指示されているのが特徴的である²³。女諸礼集は、「女中の居ずまい」に始まり、食事のマナーや箸の扱い全般、餅、強飯、茶など個別具体的な食べ物の食べ方指南、本膳料理の膳のすえ方、給仕の仕方まで食事まわりの様々な身体作法について事細かに述べられている。その後は、生活全般への注意ごととして、早起きやうがい、障子の開け閉め様、人と過ごす際の微に入り細に渡る注意点がある。内容も、人の手紙を読むな、顔をじっと見るな、陰口を叩くな、人前で髪をいじったり爪をいじったりしない、など、ほとんど基礎的な「躰」といえるような事柄が中心である。本項目は、礼儀を正しくすることが子孫や国を榮えさせる、と諭してしめくりとなる。

以上のような身体作法の項目は、女子用往来物の登場以前に女子向啓蒙書として隆盛を誇った苗村丈伯『女重宝記』元禄5（1692）年を下敷きにしている。『女重宝記』とは、中世から近世初期に収集された様々な知識の集大成を整理し読みやすくまとめた書物であり、長友千代治は、根拠を示しつつ配列・仮名を添えて解説した点にその特徴をみていた²⁴。『女重宝記』刊行翌年には『男重宝記』が刊行され、その後も多種多様な「重宝記」が刊行された。

『女重宝記』と『男重宝記』を比べると、男女で求められた教養・知識に隔たりがあったことがわかる。共に5巻組だが、『女重宝記』1巻の知識が身辺・自分自身にまつわる事柄に集中しているのに対し、『男重宝記』1巻は士農工商、朝廷や幕府、公家の身分制という社会的な項目から始まる。女性に期待される教養が、自分自身を知る、自分の姿形や内面を整えるといった内向きの視点で形成されるのに対し、男性に期待される教養は、社

会といういわば外部から自分の立ち位置を把握する視点に基づいて形成されている。食生活に関しても、『女重宝記』2巻は、『宝織』にもある食べ方、食べ手への知識教養となっているのに対し、『男重宝記』3巻は献立の書き方、菓子の字尽くし・解説など、作り手としての男性を前提としていた。注目すべきは、女性の場合、「どのように食べるのがきれいか、もしくは見苦しいか」という、女性の外形的な姿が、そっくりそのままその女性の内面の倫理や道徳の判断基準となっていたことである。矢田部英正は、日本人の身体にまつわる感覚について「たたずまい」として表現し、和服の服飾表現上の美感の分析から「目に見えない「意識」や「感覚」「感情」を表出するもの」と分析した²⁵。とくに、女性にとっては「たたずまい」に繊細に気を配ることそのものが、一種の教養として求められたことがわかる。

『宝織』の上段「小笠原包物折形」、中段「婚礼心得べき条々」、『糸車』の口絵「婚礼略式」「御厨子の図説」「黒棚の図説」「化粧の間の図説」「貝桶の図説」は婚礼にまつわるものの取り扱いであり、いずれも『女重宝記』にも登場した事項である。

(3) 6 (相性・吉凶) 一占いからみる「応用力」

『宝織』記事全体の16%を占めるのが、6 (相性・吉凶) である。『宝箱』には記載がなく、『糸車』は2%とわずかな項目であるが、他の往来物にも登場し²⁶、女性の実生活上に影響を与えた重要な知識・知恵だったことが推測されるため、ここでまとめておきたい。

『宝織』上段巻頭からは生年月日に関する占いとして、「生まれ年」「生まれ日」「生まれ月」「生まれ時」の善悪が語られている。これは現在もある性格占いに近く、前世の因縁、今生の縁や、家庭運、寿命、病、守り本尊などを占っている。続いて、夢占い、生まれ年で五行を知るための早見表、相性占いがある。「懐妊帯する日」「同向かって善き方」「女はらみ月を知る」「胎内の子男女を知る」などは、妊娠出産に関する占いであり、民間信仰ともいえ、当時の女性たちにとっては懐妊という神秘的な事象を捉えるための生活伝承であった、と考えられる。生年月日の占い一つとっても複数存在し、読者の女性たちが各人各家の好みや都合に合わせて選び当てはめて楽しんだことが想像される。また、相性については、夫や子、親戚や近隣など、固定化された人間関係の中で波風を立てず上手に立ち居振る舞うための一種の方便として活かし、合理的に振る舞っていた、一種のしたたかさのようなものも見て取れる。

性格占いに続き、家事や生活にまつわる日取りの決定や、暦の読み方に関する記事が続き、衣生活にまつわる吉日凶日を示している。女性にとって裁縫は大切な業だったことに加え、当時は反物が貴重であり、鉄の入れようが重要だったこと、物を大切にす「儉約」という観点からも、こうした験担ぎが大切にされていたのではないだろうか。「暦の中段」「暦の下段」は、旧暦の中段・下段各項目の解説にあたり、日々の生活や生育儀礼に関する日取りの吉凶を示している。ほか、暦の読み方に関する「不成就日」「毎月悪日」「願成就日」などの項目もある。

日取りや暦の読み方については、現在も使われている旧暦、太陰太陽暦の暦との共通点が多い。2024年発行の『令和7年神宮館高島暦』を見てみると、「暦の中段」「下段」「十二支別男女相性」「皇帝四季の占い」「十干の性質」「十二支一代の運氣と守り本尊」「夢判断」が、形式・内容ともに往来物とほぼ同じ項目が扱われている²⁷。『宝織』成立の明和6 (1769) 年は、すでに幕府が貞享の改暦を行い、全国的な暦内容の統一を行った後だったが、並行して各地に地方暦も存在し、土地や慣習により多様な暦が使用されていた時期であった²⁸。そうした中、『宝織』が暦の情報を読み解くためのハンドブックとして、女性たちの座右で機能していたことも考えられる。

『宝箱』『宝織』『糸車』はそれぞれ、相互に共通する内容を多く含んだ女子用往来物であった。ただし、『宝箱』は女訓と社会的知識、『宝織』は娯楽性・教養性、『糸車』は消息文例と、それぞれの特徴がある。武家は女訓中心、商家は消息文や娯楽性重視だったのではないかと予想ができるが、それぞれの読者層の違いは定かではない。本稿では、内容的に重複する部分が多く、おおむね「女性の教養」の領分が示されたものとして、3点の読者層を厳密に規定せず、考察を行った。

6. まとめ

本稿では、多数の女子用往来物から3点を選び、女性の生活や家事に関する教養・価値観がどのようなものであったかについて考察した。その結果、以下の5つが女性に求められていたことが明らかになった。

1つ目に求められたのは、和歌に関する教養・知識である。往来物では、源氏物語や百人一首などの基礎的な文学的素養にとどまらず、女性たちにとって身近な七夕のような日々の行事ごと、和歌を通じて受容するように作られていた。

2つ目に、豊富で繊細な「季節感」表現がある。手紙文例と季節にまつわる多種多様な語彙を習得することにより、女性たちには繊細で細やかな「季節感」が育てられていった。

3つ目、家事技術として、衣生活にまつわる知識、洗濯や裁縫技術の習熟が求められた。

4つ目、食べ方や身のこなしといった振る舞いにまつわる「たたずまい」の教養があった。

5つ目に、占いや暦を読み、現実を合理的に解釈する「応用力」が求められた。

女子用往来物の読者である中・上流の商家・武家・農家等の女性たちが行っていた家事の中には、衣生活の一切と日常の食事のほか、手紙文や贈答、もてなしといった交際という家事があった。こうした比較的近い人間関係での交際は、中世世界における「内治」にも通じる。中野節子は、仮名草子にある女性像を分析し、妻の務めとして「内治」の強さを指摘した。中野によれば、内治とは、「家内部の、夫、舅・姑、奉公人、さらに、一門、友達といった人間関係の中で、夫のためになるような安定した人間関係を作り上げていくこと、そのための務め²⁹」であり、女子教育は内治ができることを目的として形成されたとしている。中野は内治を「ある種の間人間関係を形成するための、情緒の提供」とも表現した。仮名草子における都市の女性の中心的な役割は、まず円滑な人間関係の構築であり、そのなかには、身ざれいにすることや、化粧、言葉づかい、振る舞いを通じて自らの身体で上品さを表現すること、芸能を身につけることが含まれていた。本稿で読んだ女子用往来物にあった「たたずまい」とは、こうした女子の教養の伝統のなかにあるといえよう。中野は、近世以降に儒教の教えが庶民化し、家や身分制度が構築されていったため、女性に求められる徳目が「婦徳」を中心化していったこと、ただし、百人一首などの和歌の教養に「内治」の情緒性が残されたことを分析している。確かに、中野が分析した中世の女性像にある「情緒性」は、性的な存在としての女性を前提としており、儒教的な家秩序のなかでは統制されてゆかざるを得なかった。しかし、和歌や百人一首は、「女用」として泊付きの教養でもあり、四季の風物や行事ごとであれば、性的な要素を周到に排除しながら、人間関係における快さや審美性等を担保することができた。女子用往来物は、日々の生活における人間関係構築のための教養や価値観を育てるものでもあったといえる。

近世、家事を担った女性たちは、「和歌の教養」「季節感表現」「衣生活に関する具体的な技術」「たたずまい」「応用力」といった教養や価値観を身につけることが期待されていた。その背景には、すぐれた時間感覚に基づいた身体感覚がある。占いをその時々状況や人間関係によって読み解き応用していくように、女性たちには、刻々と変化していく天候や時間、季節やその時々社交のコードにあわせて、瞬間瞬間に「よい」とされる事柄を適時適切に判断し、たたずまいを選択することが求められていた。そして女性たちは、手紙文においてはその時節に合った事柄を「季節感」として表現し、情緒的で審美的な感覚を表現していた。近世の家事における女性たちの生活にまつわる教養は、こうした当意即妙な、時間と身体に関する感覚に基づいたものであったと考えられる。

本稿では、生活にまつわる教養や価値観に絞って検討した。そのため、女子の儒教における位置づけや婦徳、妊娠出産・看病等の項目について、またそれらと生活にまつわる教養との関係については扱うことができなかった。本稿で検討した家事や生活にまつわる教養・価値観の近代以降の展開とあわせて、今後の課題としたい。

【註】

1 小泉和子「家事の近世」、林玲子編『日本の近世15 女性の近世』（中央公論社、1993年）、191-226頁。

2 元禄・享保期に多数出版された女性用教養書の中には、わずかながら調理や料理についての実用的知識が掲載されたものもあった。『女源氏教訓鑑』（享保6（1721）年）では、「年中料理指南」という附載記事が存在し、献立の基本的な立て方と、12ヶ月の汁物・なます・

- 刺し身・和物・吸い物・肴の作り方と材料を掲載している。同書は源氏物語のそれぞれの帖の解説を本文に、女訓、暦の読み方、文字尽くし、といった定番の項目から、茶の湯や香道、名湯指南などの娯乐的・高踏的な附載記事まで幅広い教養を扱っている。ただし、こうした料理指南がある女性用書物は例外的な存在であるため、今回は検討の範囲外とした。
- 3 吉田ゆり子『近世の家と女性』（吉川弘文社、2016年）、山川菊栄『武家の女性』（岩波書店、1983年）、杉本鉞子著、大岩美代訳『武士の娘』（筑摩書房、1994年）など。
 - 4 総合女性史学会 辻浩和・長島淳子・石月静恵編『女性労働の日本史 古代から現代まで』（勉誠出版、2019年）、総合女性誌学会編『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』（朝日新聞出版、2010年）など。
 - 5 石川松太郎編纂『日本教科書大系 往来編 女子用』（講談社、1973年）、19-36頁。
 - 6 天野晴子『女子消息型往来に関する研究—江戸時代における女子教育史の一環として』（風間書房、1997年）、1頁。
 - 7 横田冬彦『『女大学』再考—日本近世における女性労働』、脇田晴子・S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 下—主体と表現 仕事と生活—』（東京大学出版会、1995年）363-387頁。
 - 8 中村一代「女訓書付載記事の研究—『女大学宝箱』とその類書を中心に—」『日本文化論年報』第5号、（神戸大学国際文化学部日本文化論大講座、2002年3月）1-25頁。
 - 9 石川松太郎監修『往来物大系 第87巻』（大空社、1994年）掲載の、江戸・小川彦九郎および大坂・柏原屋清右衛門板、享保元（1716）年、底本小泉吉永蔵を使用。
 - 10 伊藤敏子、小泉淑江、柳香子『翻刻・影印 女用智恵鑑宝織』（燦の会、2020年）掲載の、大坂・柏原屋清右衛門板、明和6（1769）年、底本和洋女子大学附属図書館所蔵を使用。
 - 11 石川松太郎監修『往来物大系 第93巻』（大空社、1994年）掲載の、大坂・洪川清右衛門板、明和9（1772）年、底本講堂文庫蔵を使用。
 - 12 藪田貫「植田家の人々と学芸」（『NOCHS Occasional paper』5号、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センター、2007年7月）25-41頁）では、江戸時代からの旧家・庄屋である植田家住宅（現大阪府八尾市）の書庫を調査し、『女大学宝箱』が複数冊あり、何代にも渡って家庭内の女子教育に使用されたのではないかと考察されている。当家が寺子屋の教師をしていた可能性や、近隣への本の貸出を行った可能性も指摘されている。
 - 13 皆川美恵子『頼静子の主婦生活—『梅颯日記』にみる儒教家庭』（雲母書房、1997年）。
 - 14 牧田りゑ子「商家女性の労働—主婦と奉公人—」総合女性史学会 辻浩和・長島淳子・石月静恵編『女性労働の日本史 古代から現代まで』（勉誠出版、2019年）150-162頁。
 - 15 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』（黎明書房、1981年）32頁。
 - 16 青木美智子「名家の日記にみる農村女性の労働と休日—近世後期の年季奉公人を中心に—」総合女性史学会 辻浩和・長島淳子・石月静恵編 前掲書（2019年）136-149頁。
 - 17 エラ・ルーヴィ・ウイスウェル著、河村望・斎藤尚文訳『須恵村の女たち 暮らしの民俗誌』（御茶ノ水書房、1987年）では、ほぼ前近代と同様の生活をしていたと思われる須恵村（現熊本県あさぎり町須恵）において、ほとんど家具もない貧しい家庭でも、家事の取り仕切りがうまく、整った生活をしている家庭があった、という村人の談話が紹介されている。その様子からは、家事にまつわる価値観や美意識が、教育や知識により後天的に教えられるものというよりも、生得的なものであったことも推察できる。ただし、この点については、本稿の扱える範囲を超えているため、稿を改めて論じたい。
 - 18 脇田晴子・林玲子・永原和子編『日本女性史』（吉川弘文館、1987年）172-175頁。
 - 19 門玲子「江戸女流文学史の試み」鶴見和子他監修『女と男の時空—日本女性史再考7 爛熟する女と男—近世 上』（藤原書店、1995年）143-198頁。
 - 20 中村、前掲論文。
 - 21 江森一郎・小泉吉永「『絵図大事典』の編集・後記」江森一郎監修『江戸時代 女性生活研究（江戸時代女性生活絵図大事典 別巻）』（大空社、1994年）14頁。
 - 21 伊藤ほか『宝織』、26頁。
 - 22 貝原益軒『万宝鄙事記』、田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成 続編江戸期2』（渡辺書店、1969年）所収。
 - 23 身体動作や姿勢などにも触れるため、広義の「身だしなみ」とも解釈できるが、今回の3-I身だしなみの項目には化粧、美容に関する項目をまとめたため、3-IIに分類している。
 - 24 長友千代治・校註『女重宝記・男重宝記 元禄若者心得集』（社会思想社、1993年）、385頁。
 - 25 矢田部英正『たたずまいの美学—日本人の身体技法』（中央公論新社、2011年）、177頁。
 - 26 例として生まれ年については『女文庫高蒔絵』（享保6（1721）年）、生まれ日は『女用智恵鑑宝織』（享保14（1729）年）、十二支については『大宝百人一首紅葉錦』（天保12（1841）年）、六十図について『百人一首至宝袋』（延享3（1746）年）、『雛鶴百人一首花文選』（宝暦6（1756）年）など（以上、江森一郎監修『江戸時代 女性生活絵図大事典 第6巻』（大空社、1994年）より）。
 - 27 神宮館編集部編『令和7年神宮館高島暦』（神宮館、2024年）。
 - 28 岡田芳朗『改訂新版 旧暦読本—日本の暮らしを愉しむ「こよみ」の知恵』（創元社、2015年）。
 - 29 中野節子『考える女たち—仮名草子から「女大学」』（大空社、1997年）、62頁。

【参考文献一覧】

- 天野晴子『女子消息型往来に関する研究—江戸時代における女子教育史の一環として』風間書房、1997年。
- 石川謙『日本庶民教育史』玉川大学出版部、1998年。
- 石川松太郎監修『往来物大系 第87巻』『同 第93巻』大空社、1994年。
- 石川松太郎編纂『日本教科書大系 往来編 女子用』講談社、1973年。
- 伊藤敏子・小泉淑江・柳秀子『翻刻・影印 女用智恵鑑宝織』燦の会、2020年。
- 江森一郎監修『江戸時代 女性生活絵図大事典 第6巻』大空社、1994年。
- 江森一郎・小泉吉永『江戸時代 女性生活研究（江戸時代女性生活絵図大事典 別巻）』大空社、1994年。
- エラ・ルーリィ・ウィスウェル著、河村望・斎藤尚文訳『須恵村の女たち 暮しの民俗誌』御茶ノ水書房、1987年。
- 岡田芳朗『改訂新版 旧暦読本—日本の暮らしを愉しむ「こよみ」の知恵』創元社、2015年。
- 門玲子「江戸女流文学史の試み」鶴見和子他監修『女と男の時空—日本女性史再考7 爛熟する女と男—近世 上』藤原書店、1995年、143-198頁。
- 小泉和子「家事の近世」、林玲子編『日本の近世15 女性の近世』中央公論社、1993年、191-226頁。
- 神宮館編集部編『令和7年神宮館高島暦』神宮館、2024年。
- 杉本鍼子著、大岩美代訳『武士の娘』筑摩書房、1994年。
- 総合女性史学会 辻浩和・長島淳子・石月静恵編『女性労働の日本史 古代から現代まで』勉誠出版、2019年。
- 総合女性誌学会編『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』朝日新聞出版、2010年。
- 田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成 続編江戸期2』渡辺書店、1969年。
- 中村一代「女訓書付載記事の研究—『女大学宝箱』とその類書を中心に—」、『日本文化論年報』第5巻、神戸大学国際文化学部日本文化論大講座編、2002年3月、1-25頁。
- 中野節子『考える女たち—仮名草子から「女大学」』大空社、1997年。
- 永原慶二『学麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館、2004年。
- 長友千代治・校註『女重宝記・男重宝記 元禄若者心得集』現代教養文庫、社会思想社、1993年。
- 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、1981年。
- 松田智子「近世における女子教育史についての一考察—江戸時代末期の女子教育について—」、『奈良学園大学紀要』3巻、奈良学園大学、2015年、125-134頁。
- 皆川美恵子『頼静子の主婦生活—『梅颯日記』にみる儒家家庭』雲母書房、1997年。
- 矢田部英正『たたまいの美学—日本人の身体技法』中公文庫、中央公論新社、2011年。
- 山川菊栄『武家の女性』岩波文庫、岩波書店、1983年。
- 籾田貫「植田家の人々と学芸」『NOCHS Occasional paper』5号、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、2007年7月、25-41頁。
- 横田冬彦「『女大学』再考—日本近世における女性労働」、脇田晴子・S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 下—主体と表現 仕事と生活—』東京大学出版会、1995年、363-387頁。
- 吉田ゆり子『近世の家と女性』吉川弘文社、2016年。
- 脇田晴子・林玲子・永原和子編『日本女性史』吉川弘文館、1987年。
- ◎電子資料
- 曲亭馬琴『増補俳諧歳時記栞草』1851年、国書データベース
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100372354/8?ln=ja>
- 中村甚丞『女筆四季往来』福森兵左衛門、1693年、国書データベース
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100275040/29?ln=ja>
- 山本序因『女源氏教訓鑑』須原屋茂兵衛、1721年、国書データベース
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100258437/1?ln=ja>